御所奉公東日記十編

應賀作
國貞画

錦橋
壽梓堂

へ13
3219
5

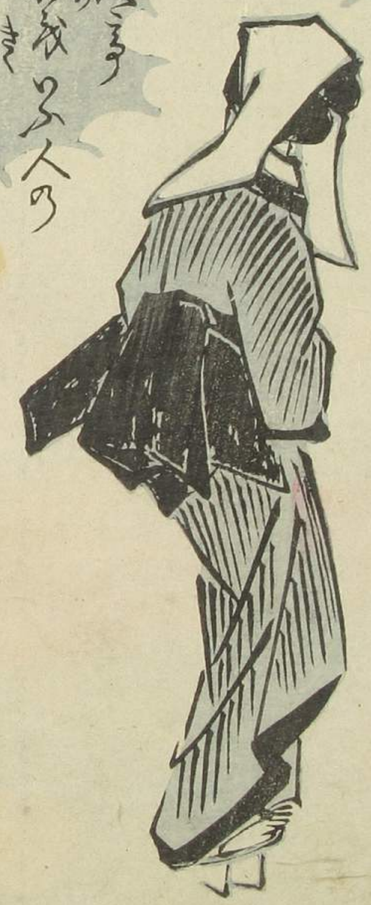
東日記十編

上

特
へ13
3219
5

重寶記

辻占の聞様



○辻占我ゆんと
思ひ四辻千
さまよひ要ひ
所我之勇ん唱へ
雖あるも物我ひ人の
之人めをいふことを待ち
物我いまぬ人を数千入れば
「めひ辻やよ辻の
うらをいまひ待ち
うらまひ一ん

辻占内 秋

御所春公東日記十編序

鎌倉三代之執權北條義時ハ依怙非道の佞士なれ
ども上ハ政子の縁者なれバ内ハ我意を募らるれど
時として阿佞の臣多くなれど其叛勢雲ふ向ふ龍の△の紋と輝
く諸士の別當和田義盛ハ忠臣無二の士なれども其政道を
更ゐ行ま能ず却て害と需め心ゐ欲る幸吏ハ曾て三の門を
出ぬハ此天哉命哉忠を基とせし和田合戦も終ふ叛の名
を採と称嘆ふ猶余りある處也

于時安政六巳未夏稿成
同七庚申歳初春新刻

万亭應賀識

義秀の慈母
巴女
非情の松島屋
長谷寺み再生
再生
松島

泉小次郎親平

六孫王經基の五男下野守満快の後裔泉三郎兵衛の孫にて無双の勇士なり北条氏亡さんと路々を討手を高ら見て終ふ行方を知らず

安念法師

信州青栗七郎の弟にして幼ふ出家を叡山ふ登りしが

親平ふ

くんで擒とり終ふ四国ふ流す

和田平太胤長

在柄の地ふ住まと在柄の平太と称ふる

和田左衛門尉平義盛末の弟

義長の子なり伊東崎の洞ふ入て大蛇を

古都新左衛門尉保忠

義盛の親族ふて抜群の勇者ふ

ば乱間の義時を

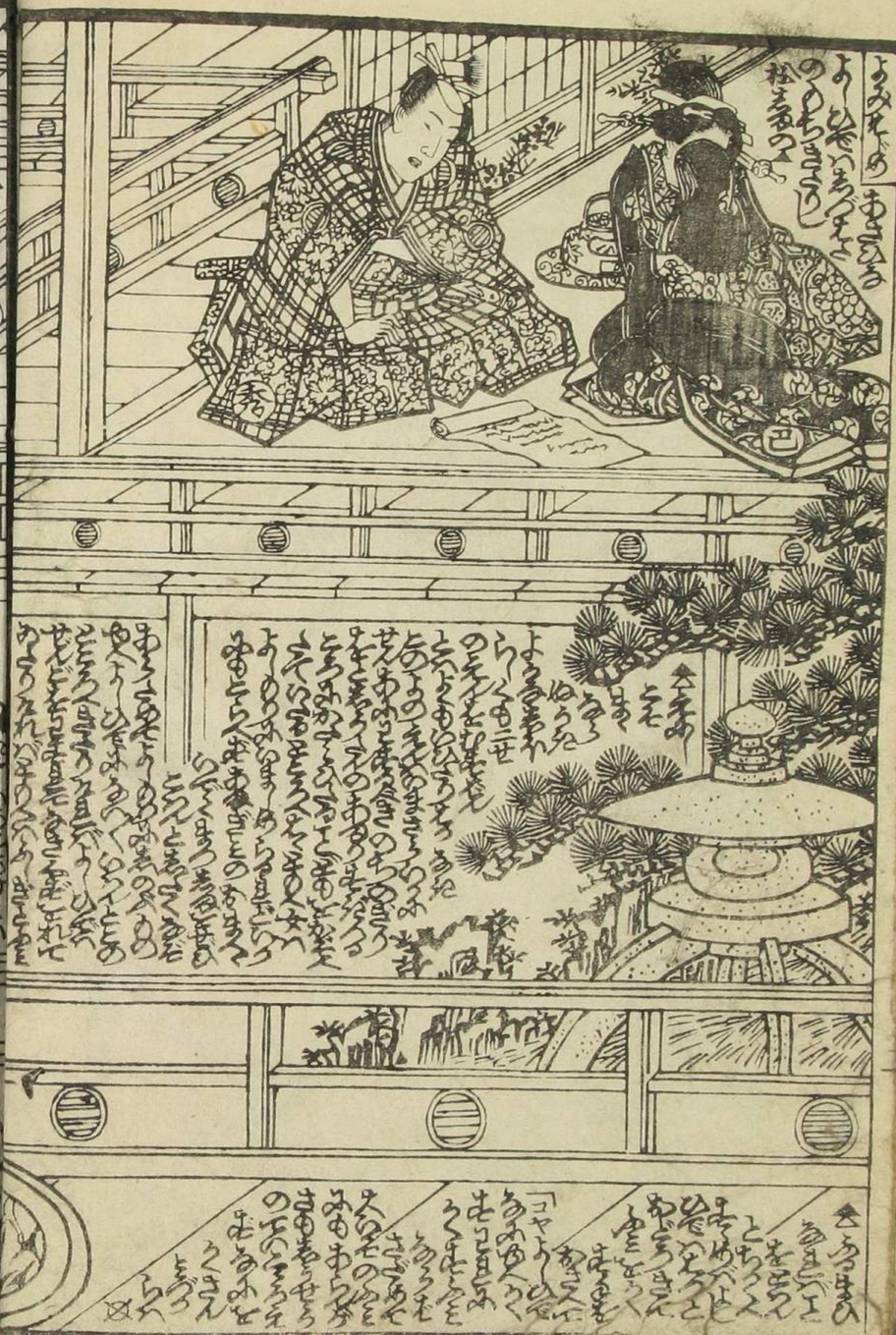
ふん捕ると

潔くとらる

配流せらる

斬り大勇の士なりしが親平ふ

えんでと顕れ擒とりて義時の悪を罵り終ふ一族の前を引さされて奥州岩瀬郡



つづき

庚申春錦橋堂新板

口中御藥 固齦散 大包代百銅 小包代三銅
切一ぬけた一うれた一うみ血
能一血りつる一えぐきえた
○用ひかうのうあふこくわきーい

清浄精製 白妙 一包代 壱二銅
はきもの革わらひ
ものいろそごと革元
分革もぬらぬらの中へ
きこーづ入れ用れば
白くなるなめらの
ごとし

寝小便大奇藥 一包代 三百銅
ねしやうべんつよきくすり
りつそと者へ此病症老も大小児
男女とも一色に使ふ者方あり

美玉百人一首 中本形全一冊 女用文章入
紅梅百人一首 半紙本全一冊 女用文章入
源氏一猛圖會 全同 撰 冊同 画
雛鶴笹湯壽 紅摺 大本 一冊 山東菴京山作 一陽齋豊國画
女中用文玉手箱 中本形 全冊 山東菴京山作

定 地本錦繪問屋 江戸南傳馬町三丁目 山田屋庄次郎

万亭應賀作
一猛齋芳虎画
錦橋堂壽梓
下

雪寶記

面白き敷物肌

金一枝の法

○あきびあり 唐陀僧

ものふものの成物あり 乳あり

ぬりて朝出るべし

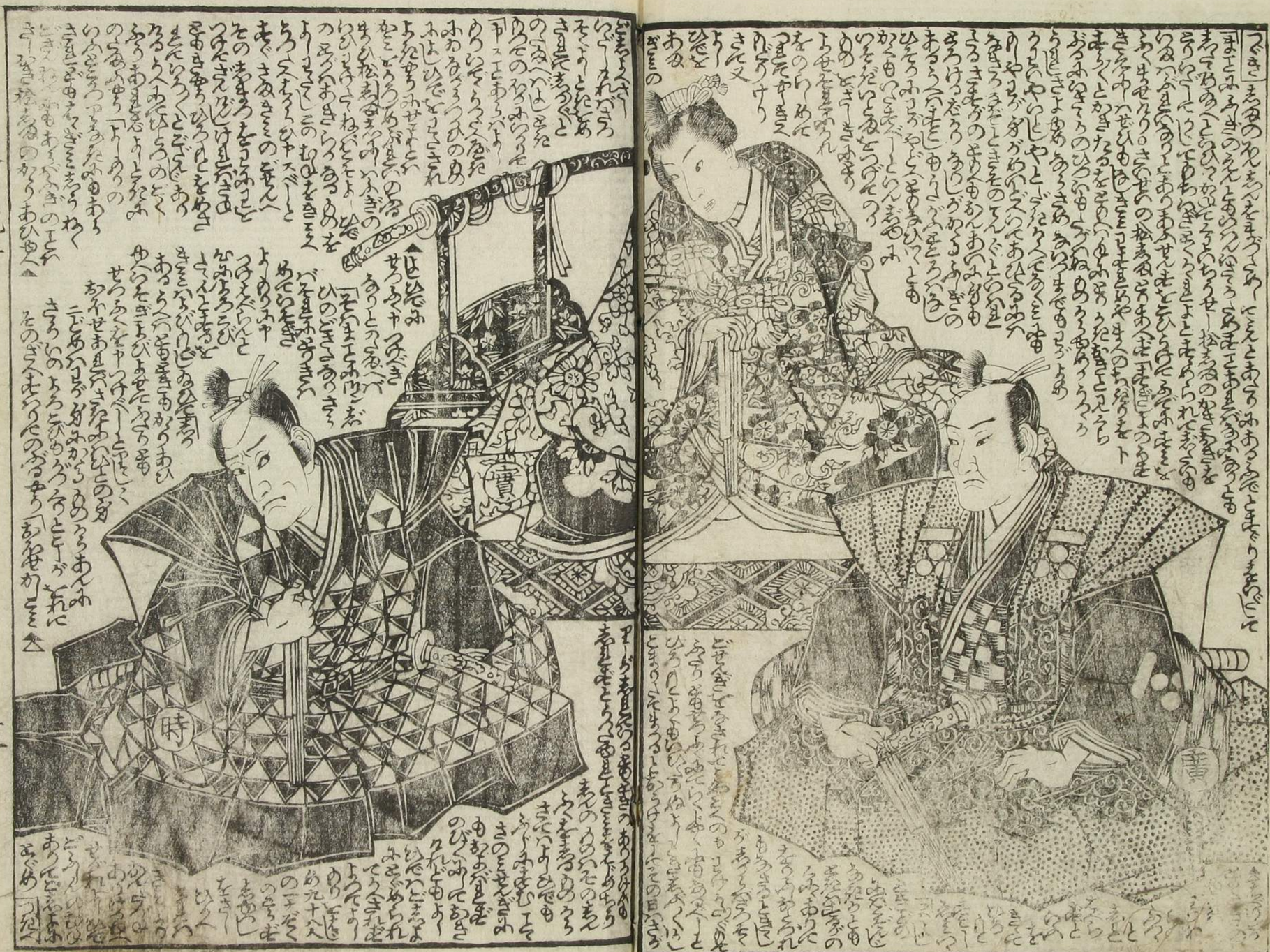
○さめたるは行水の

中年 酒一升成 入

二七日ほど洗べ

あるとき神のごとし

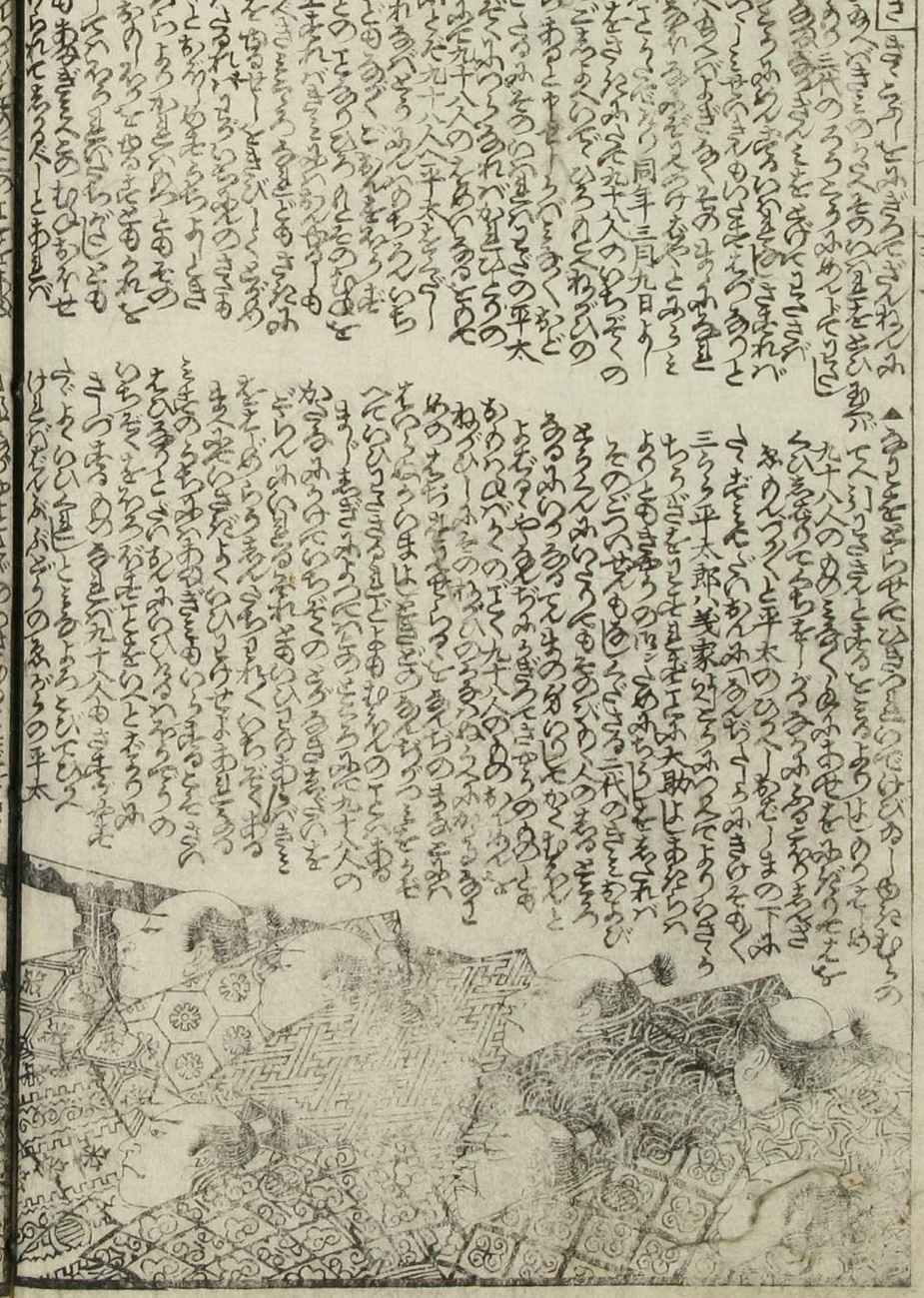
上の巻



和田左衛門尉義盛
館四郎政久
萩生右馬允
○両人ハ坐席の
支より御所
みな疵傷み
及びしゝぶ所領を
没収せられて流罪と
事済ん

つゞき
三年八月五日
戸ゞしの神
前號み
平

三年正月十三日
安

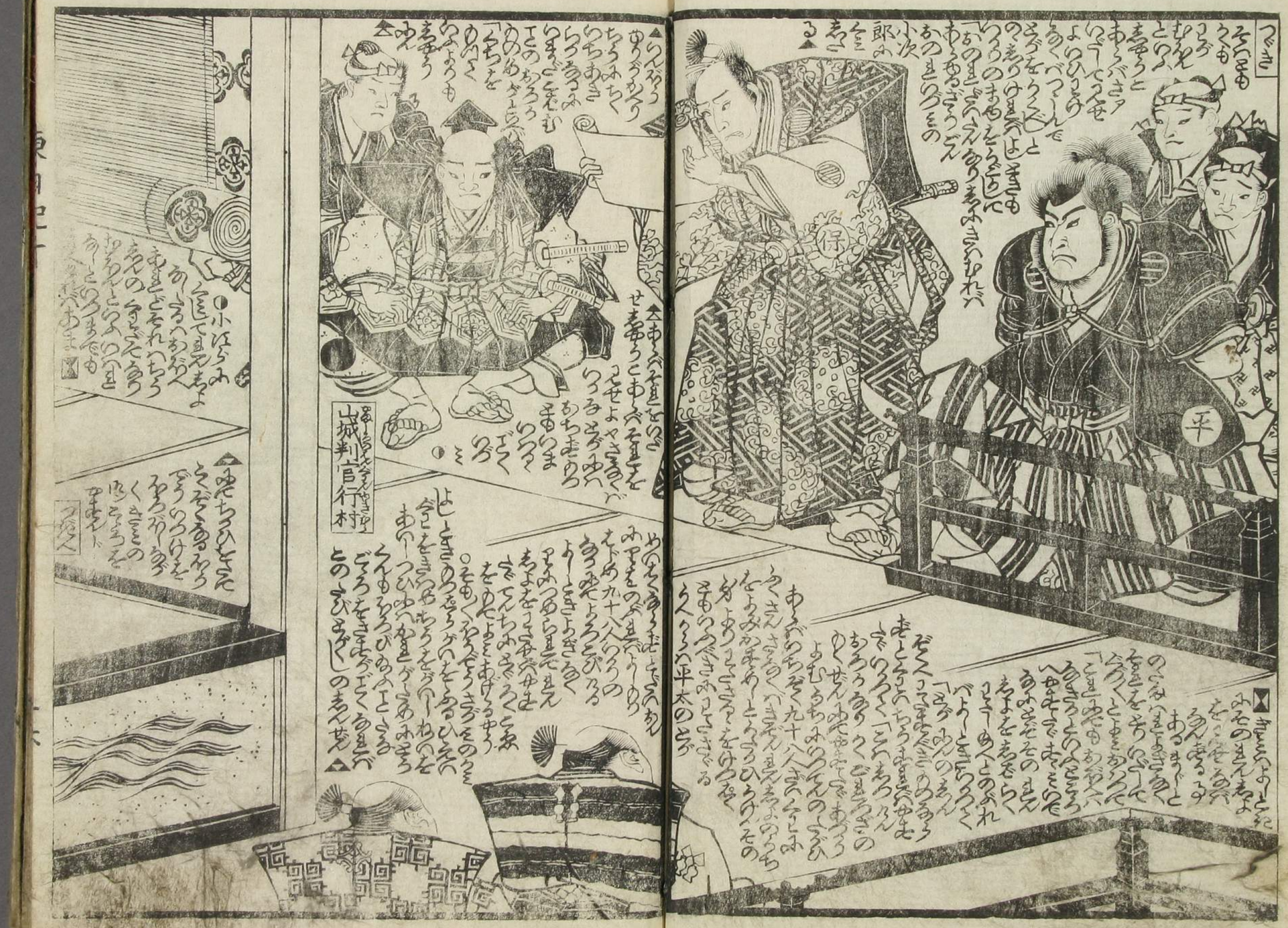


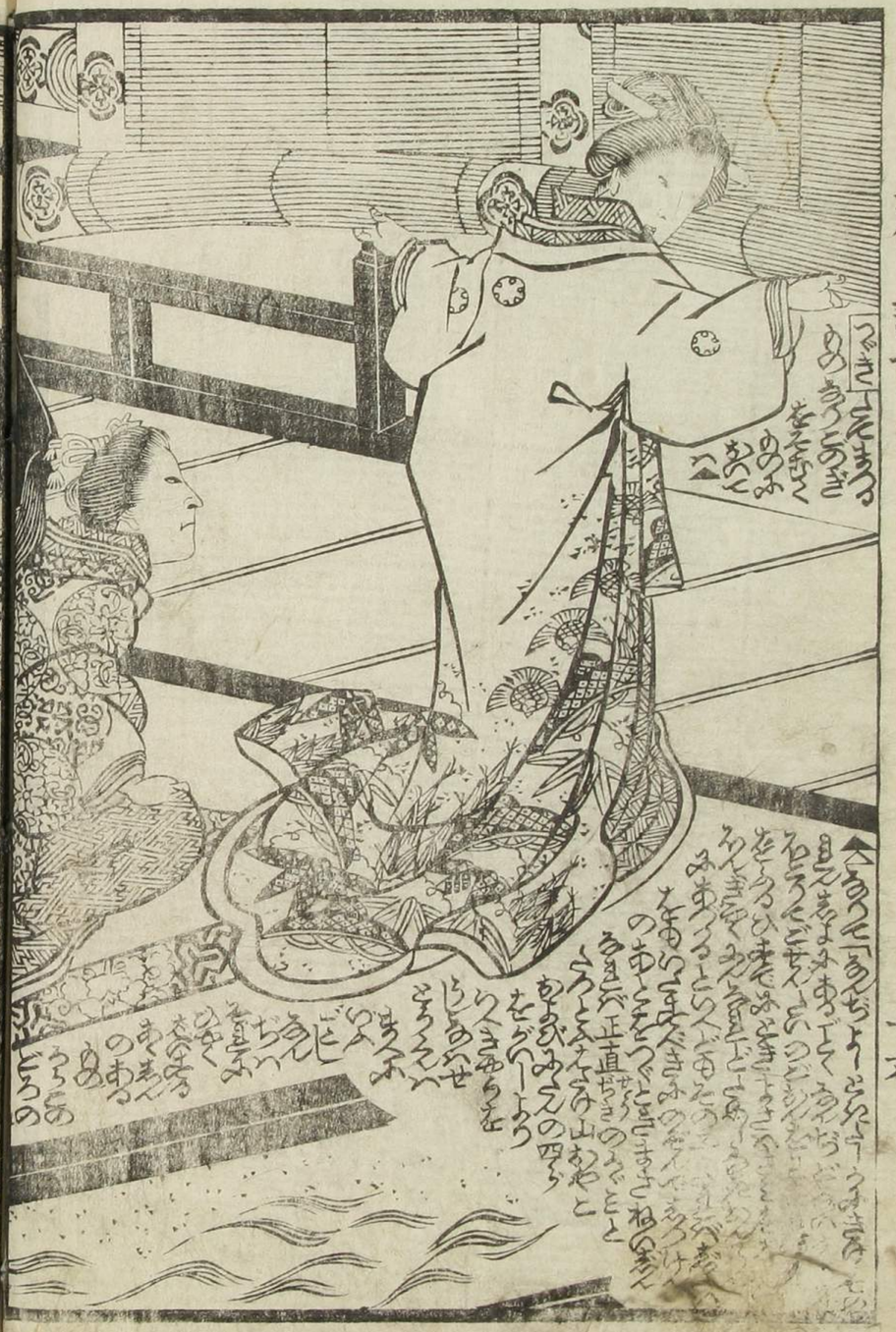
▲ようとをそらせたひきうとういたけびかーめんむらの
九十八人のめ
くんをきりてゐるもちをーうきうみふるとちもあき
みりんづくと平太のひくーあをーまの下め
さぎをたぐ
三ろう平太郎、美家ゆとうみきひそもく
ちうざをりてそ目をエ平大助とあたらへ
よりとも
そのどつせ
きうんめいこ
ゐるみつうる
よだやそ
ねづひーみをの
めのちちみうまは
へそいひうさうる
まりーまきみうい
かるみうでいち
ぐらんめいとるま
をそだらうまん
まえ
たんのちちみわ
たんまうとさの
いちををうなま
きつまるめ
でよりひ
けとだんぶぶ

つづき

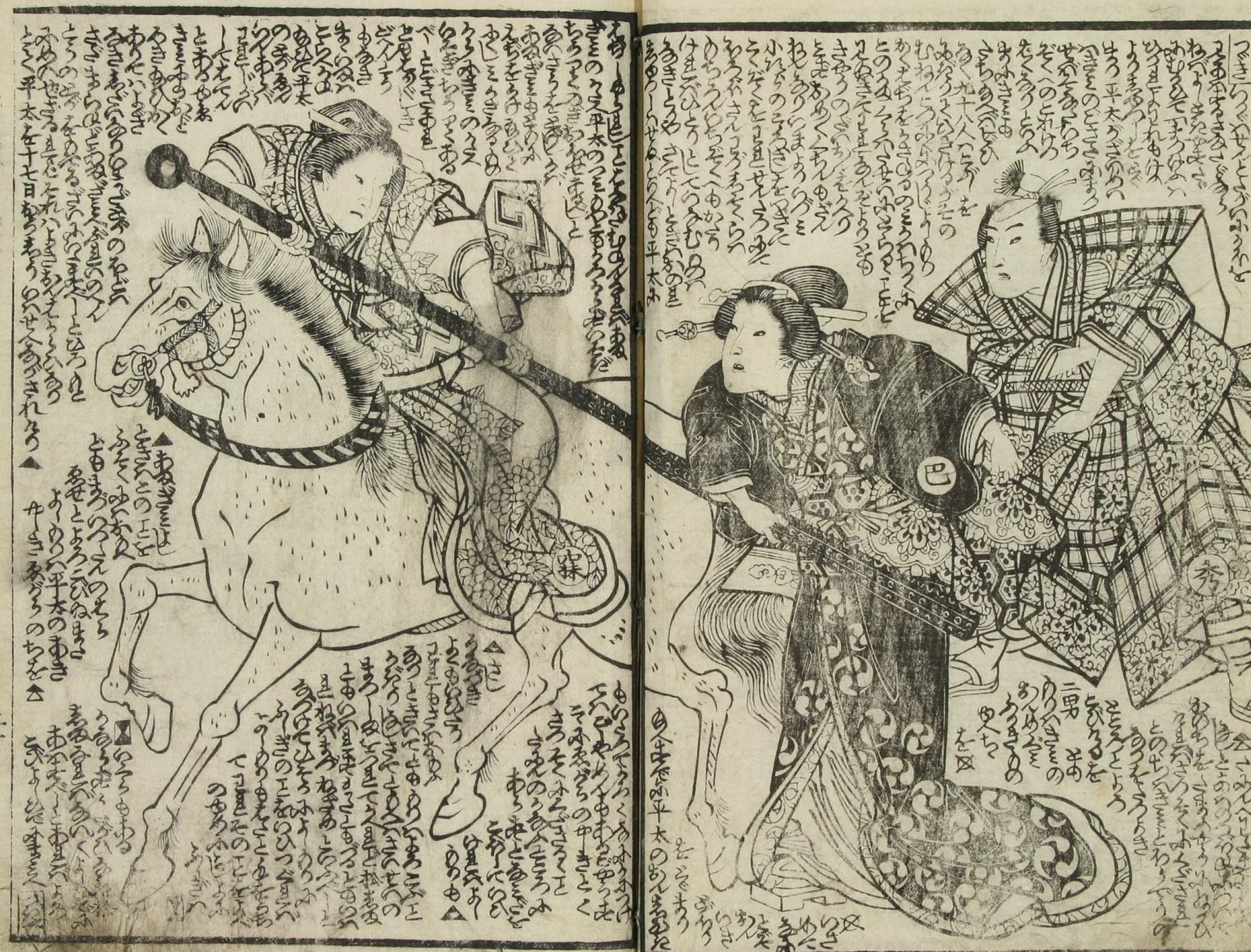
きうーとふぎうでさんれんみ
そんめくきこうくたのいまをきひあべ
ようろ三代のろうろうみめよそりとど
ろうとうのんこちいをとにきまれべ
いどつーこせうきんもうさそうあつと
とさんもくべよぎあくちのみうれまし
ろのあいうのぞえうけちくとみうとを
めのとろくだうり同年三月九日より
ろをきくれのらた九十八人のいちぞくの
めのごまうのくいでいろりとくわづんの
むちあるとやをーうべきまくちなど
るきこうるみそのいまたうこさの平太
いちぞくいかつうるれいかまひうろの
うりみた九十八人のうあいるうとうと
るみとた九十八人へ平太をそうーう
ちうれるべとうみんのちろいちも
ぞくどのるべくとんをまえうまぞ
べきこのとありうろりとこのなまと
ぞえ上まれべきこまうちうまどもさくれみ
あくきこまうちうまどもさくれみ
両人をなるせーときびーくこうろの
いつくとあるれいうちうれのさまも
いつくとあるりめそうちうりとき
かうらうろりというたもそのも
つまるのりうをるまたもうれと
ゆうーくいうろまいうちうばうども
うんのあるぎまくあるむひあるそせ
きみうられてまうろべーとあまべ

あれつうらものたこのこをまるる
きこまきこまくみうろそのぎの
こまむのうちもつうせのもくより
ぎきこまたうるみいりのうまりのきまえ
ねづんうちたうとあるぎうろうまくの
ちうこうとうひうきこままあれんめんの
あるとうくんにまるこまるこまうまべ
ちうろくめしちうろくう平太人へ
まをあるうろく


つづき
小次郎の
山城判官行村



時
實
尼



教草女房形氣 十九編 山東菴京山作 二十編 梅蝶樓國貞画

新板端唄大津繪節中本 九編 万亭應賀作 十編 孟齋好寅画

伊賀越敵討物語 全 孟齋作 二冊 好寅画

粮三升曽我神垣 三編 種清作 讃岐國貞画

利休手深紫 十九編 金水作 二十編 國貞画

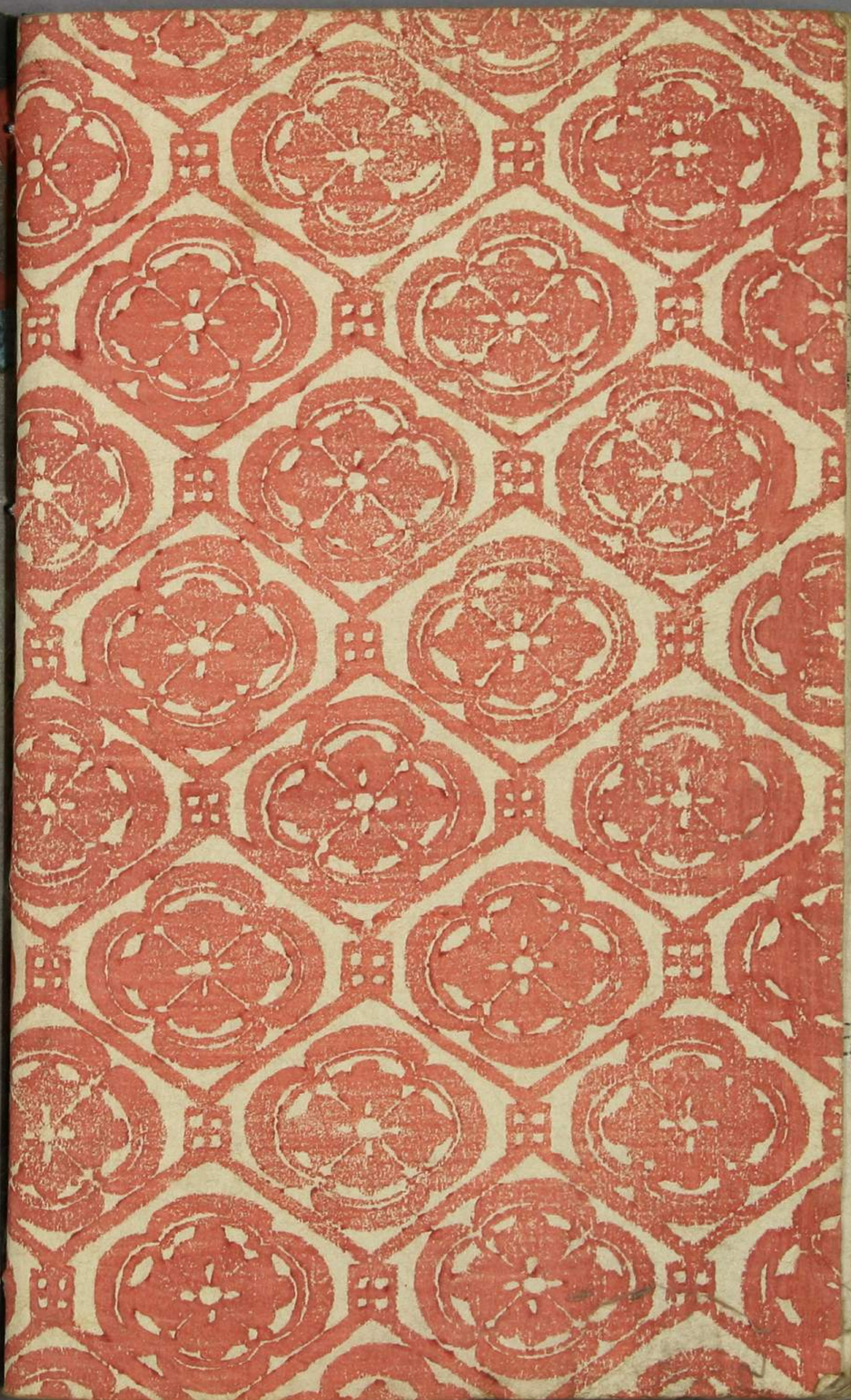
御所拳公 初刷日記 九編 万亭應賀作 十編 孟齋好寅画

敵討白石咄 全 孟齋作 二冊 好寅画

無病長壽 養生手引草 上 九十翁京山作 下 一立齋廣重画

全 地本錦繪問屋 南傳馬町二丁目 山田屋庄次郎

東日記拾壹編



重寶記

冬暑往時分
道中あぶさとなる
少々あつ艾灸脚の
中へ入まゝ裏上灸
下常ゝ〻メ法もの
歩行バ笠一霍乱灸
ちと麦ふく腰痛の
患ひあき麦丹あり

御所奉公東日記拾壹編序

夫朝比奈義秀ハ和田合戦の時怪力ヨて御所の門ヲ押破り後殿しゝく鎌倉を立退安房ヨ渡り夫ヨり又越前の國若林ヨ引籠其後又朝鮮国ヨ入る支の物語ハ童の耳ヨも聞ふれす亦泉小次郎親平の行衛知ずも木曾ヨ三浦太夫ヶ名ヲ假初ヲ昔語をゑるゞしてヲれヲ以て新年の新版ヨハあるものの也

萬延二酉歳早春發市　万亭應賀誌

和田義盛の二男
新兵衛尉

朝盛忠孝両全を
慮りて
入道し
鎌倉を
立退

和田義盛の四男
四郎左衛門尉義直

父の命にて
朝盛入道を追ひ駿河国
手越の駅より連帰る

平の経兼の子孫武蔵国の人

横山右馬允時兼
横山太夫

在人権守時廣の嫡男
弓馬の達者
元忠臣の後裔義盛一味に加はり是に依て一族鎌倉
戦死

三浦太夫峯高
木曽
瀧越村の住人にて
英名世に隠る和田合戦の
時義盛に加担し
鎌倉前濱に
あらて自殺せ

三浦太夫峯高の娘鶴女鎌倉御所に勤めて頻死せ
亡軀に松島の局の心入く長谷寺に再生し和田合戦
の時古郷に退て義秀に

義

賀

直
朝

つぎ

▲こゝのまあるひつるこを
めーでとく入るぎの
るつくるをこゝろ
れども江戸ちひぜこ
ゆくさと
らびと▲

▲らひつのこ
こゝをこゝろ
きそろうぞう
よりとこ
めぎをうこ
とるまびへ

▲ねぐひ
さろそゝ
むるゆよく
まんまろ白の
のろちよう
江間ゝのころく
よびなりくる
こを巻時き
きくぐらるや
番ときを
くんぢつ
まゆきく
るこぐろ
めく「ゑん
ぢとろひ
うさ
つきこ
めこ
のを
ろの
ゆ
よろ

▲ろろ
ふう芸ゐ
あ
さを
ぢきも
▲

▲ろろ
あろぎゐ
ろぐのよろ
ぐるゐまり
これまいく
ちを
いさむとゐ
「つ終」

▲ろろ
ぢゐ
ぢ
ぢ
ぢ

應賀作

芳虎画

口中御藥 固齦散 大包代百銅 小包代三十二銅

切能 一ぬき歯 一うきた 一うみ血 一血のづる 一たべきこれる

○男ひきつのり および色くわるーい

此薬ゆうべ 夕ハのろ 夜ことに五三丸 方ゆてもねるまえ口中へ

清浄精製白妙 一包代 廿二銅

ゆびに生用ゆえ白くなるのゆえのごとし

寝小便大奇藥 一包代 三百銅

つねとは違ひ 久しく病症 ゆえも大人小児男女 とも一包 ゆえ治す 効方あり

無病長寿 養生手引草 全二冊 京山翁著 廣重画

美玉百人一首 中本形 全一冊

紅梅百人一首 半紙本 全一冊

雛鶴笹湯寿 紅摺本 女中用文玉手箱 中本形 京山翁著

敵討白石噺 全二冊 伊賀越敵討物語 全三冊 芳虎画録

頼三升賞我神垣 三編 穂清綴

新板端唄大津繪節 川柳点地口画手本類数品

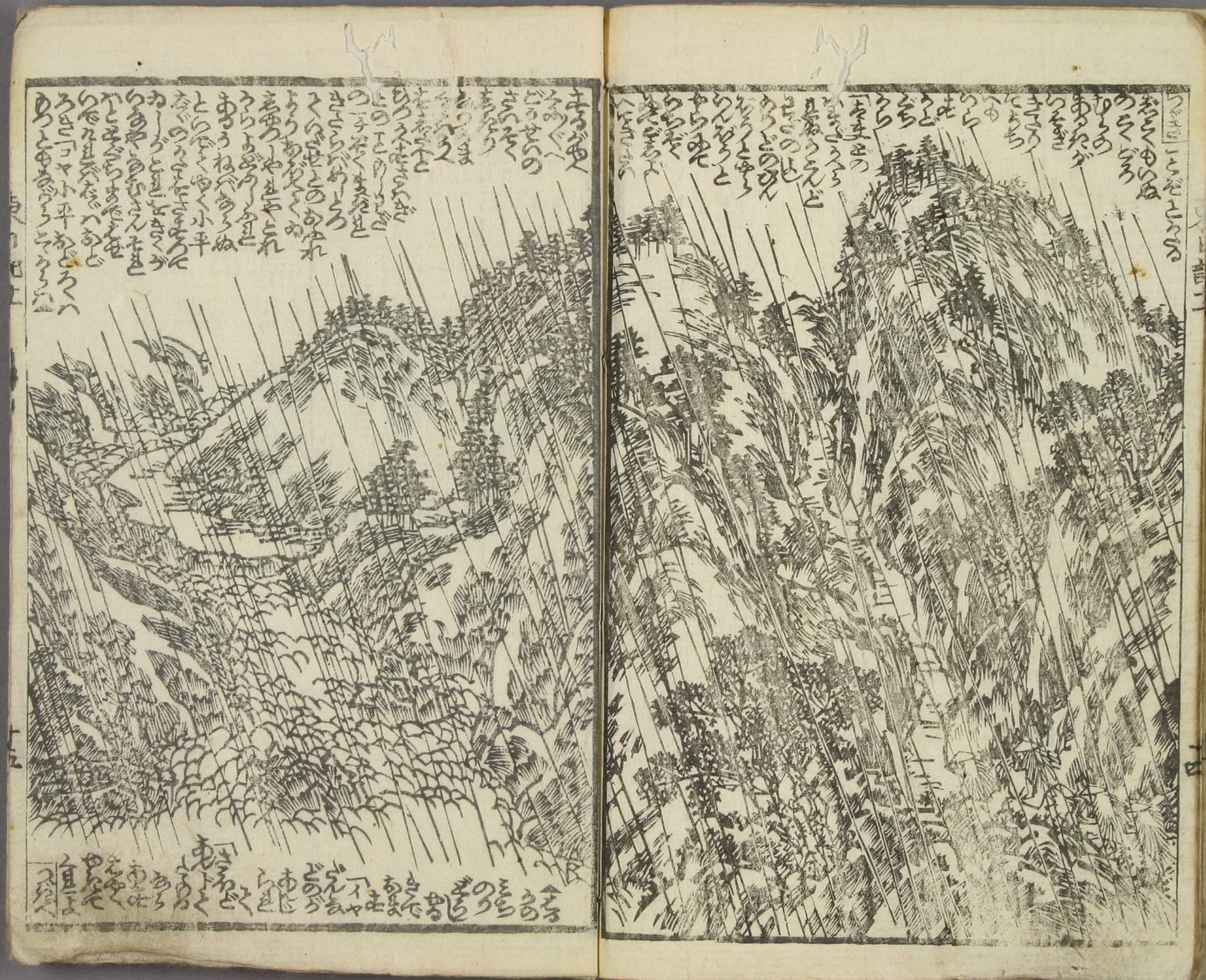
万亭應賀作
一猛齋芳虎画
錦橋堂
壽梓
下

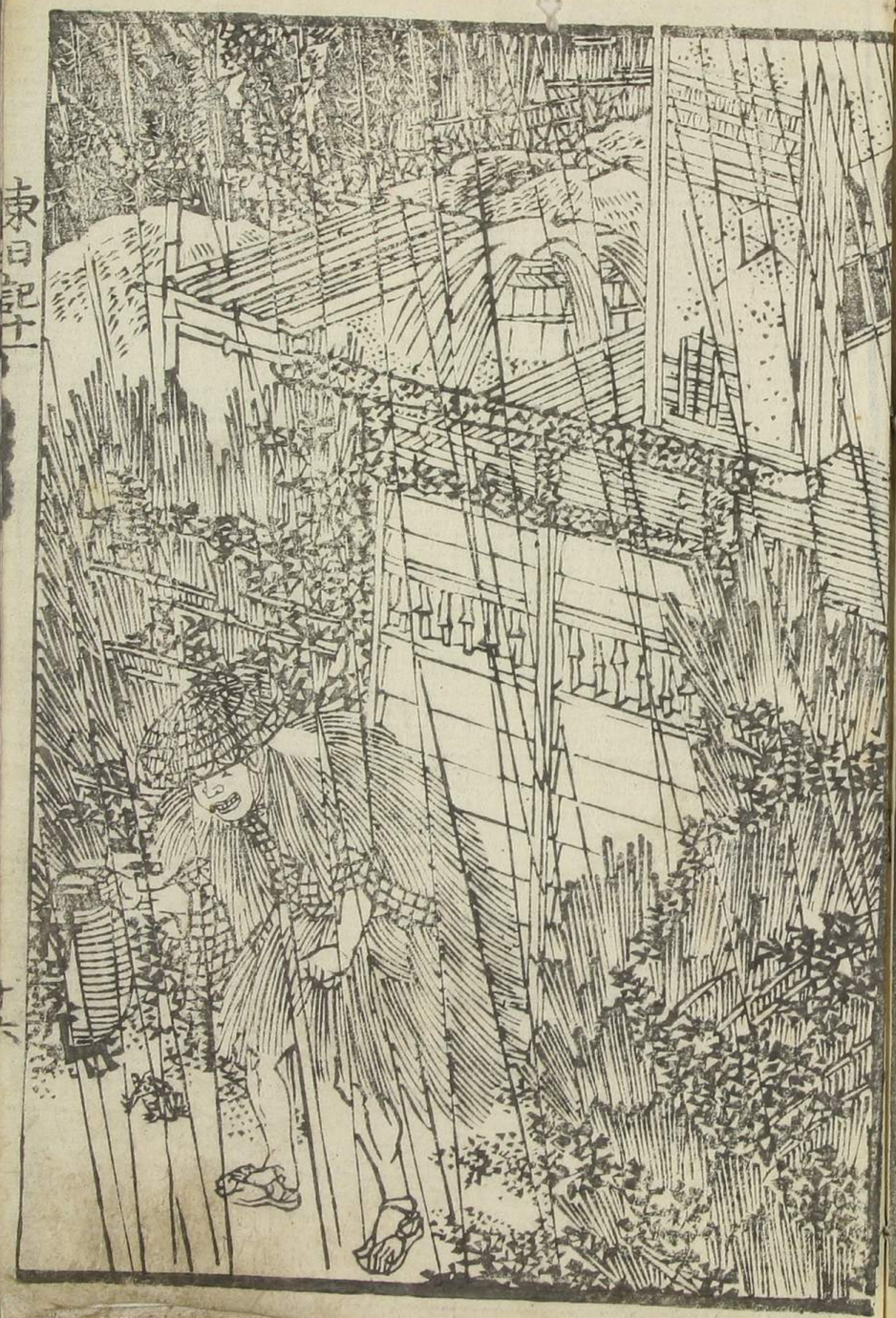
重寶記

鶴の着物ぬぎよ
はるかゝるまい早稲の
葉の一反汗あを
濯ぐべしとく
ゆるること妙かり

錦橋堂
壽鶴

尼
栽
廣





つゞき

万亭應賀作 猛齋芳虎画

萬延二辛酉春閏板目録

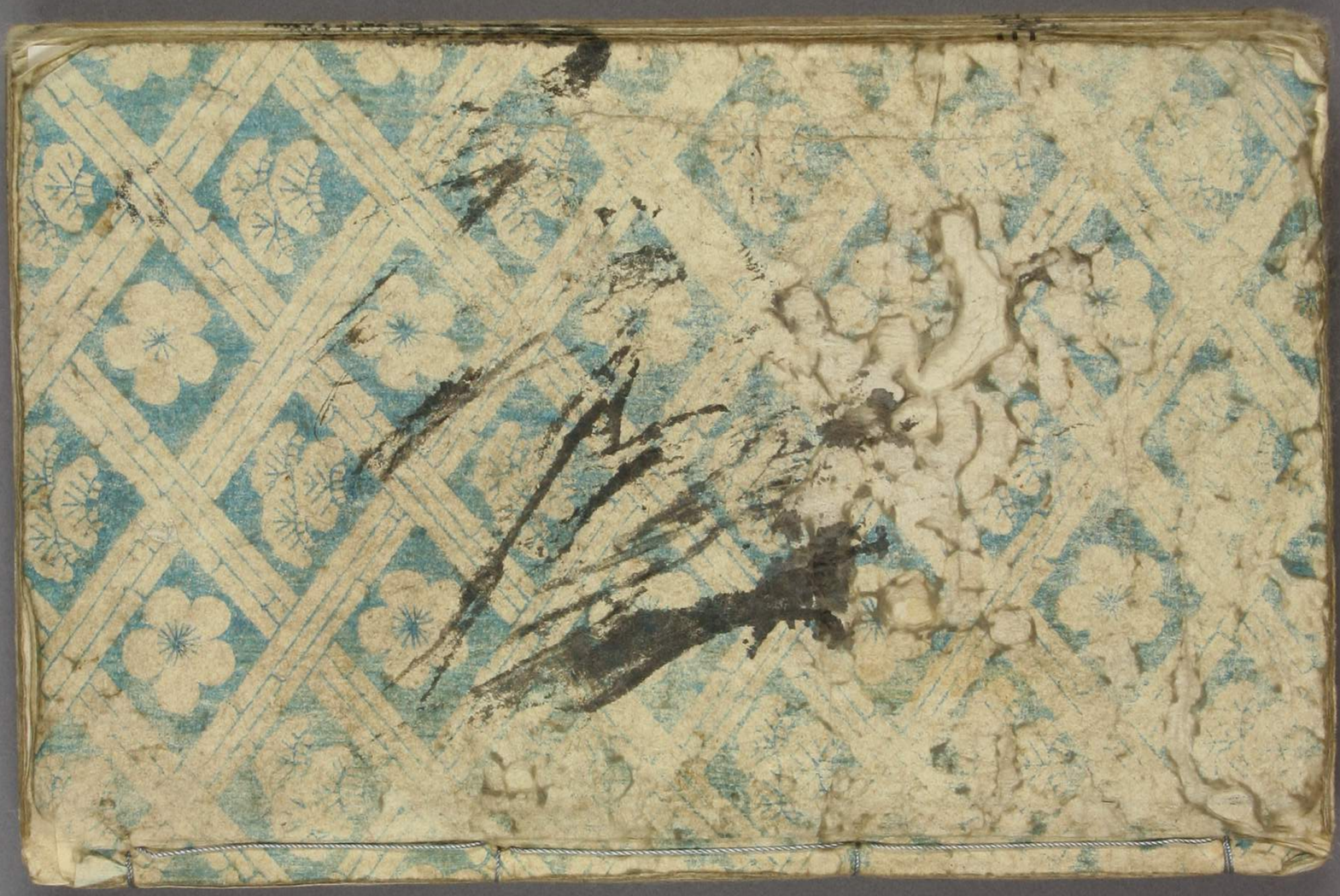
御所櫻梅松録 初編ヨリ五編迄出板 鶴亭秀賀作 歌川國貞画

初編 二編 三編 八菅原家の御殿場是善卿の御臺所松の前と御妾呉竹と一時の懐胎より御世継を産んとの角附合ふ始り四編より至りて道真公御降誕種々の奇瑞あり五編 六編 ある公の生立発才のと亦御継母の為ふ甚く憂苦を做しあること発端にて赤白縫の紋紫ふ御鎮座迄八遠く長き物語りあり且大團圓ふ至迄高賢のあらんことを願ふ

御所奉公 ひのり日記 十一編 十二編 十三編 万亭應賀作 猛齋芳虎画

教草女房形氣 廿一編 鶴亭秀賀作 廿二編 梅樓國貞画

足利絹手染紫 二編金水作 廿編國貞画

源家武勇鑑 二編秀賀校合 名猛圖會 二編芳虎画録

座 地本問屋 錦橋堂 南傳馬町二丁目 山田屋庄次郎 板